



FDとは『ファカルティ・ディベロップメント (Faculty Development)』の略で、大学の授業改革のための組織的な取り組みのことをいいます。本学では、教員がおこなう授業について、学生のニーズに応じていくためにどのような工夫ができるか、などを検討する『FD推進部会』を設置しています。



授業評価アンケートについて（2010年度）

このアンケートは、より質の高い教育を実現するため、授業について、学生の皆さんの声を聞くことを目的に行われています。寄せられた声は、より充実した授業の実現、さらには神戸外大の魅力を一層向上させるための貴重な資料となります。あらためて、ご協力いただいた学生、教員の皆さんにお礼を申し上げます。

2010年度アンケートの結果について、FD推進部会でとりまとめました概要をご報告いたします。

<授業評価アンケート概要>

この「授業評価アンケート」は大学の自己点検評価の一部として企画・実施したもので、今回で10回目となる。今回も教員と学生双方のご協力を得て、約97%の科目で実施することができた。

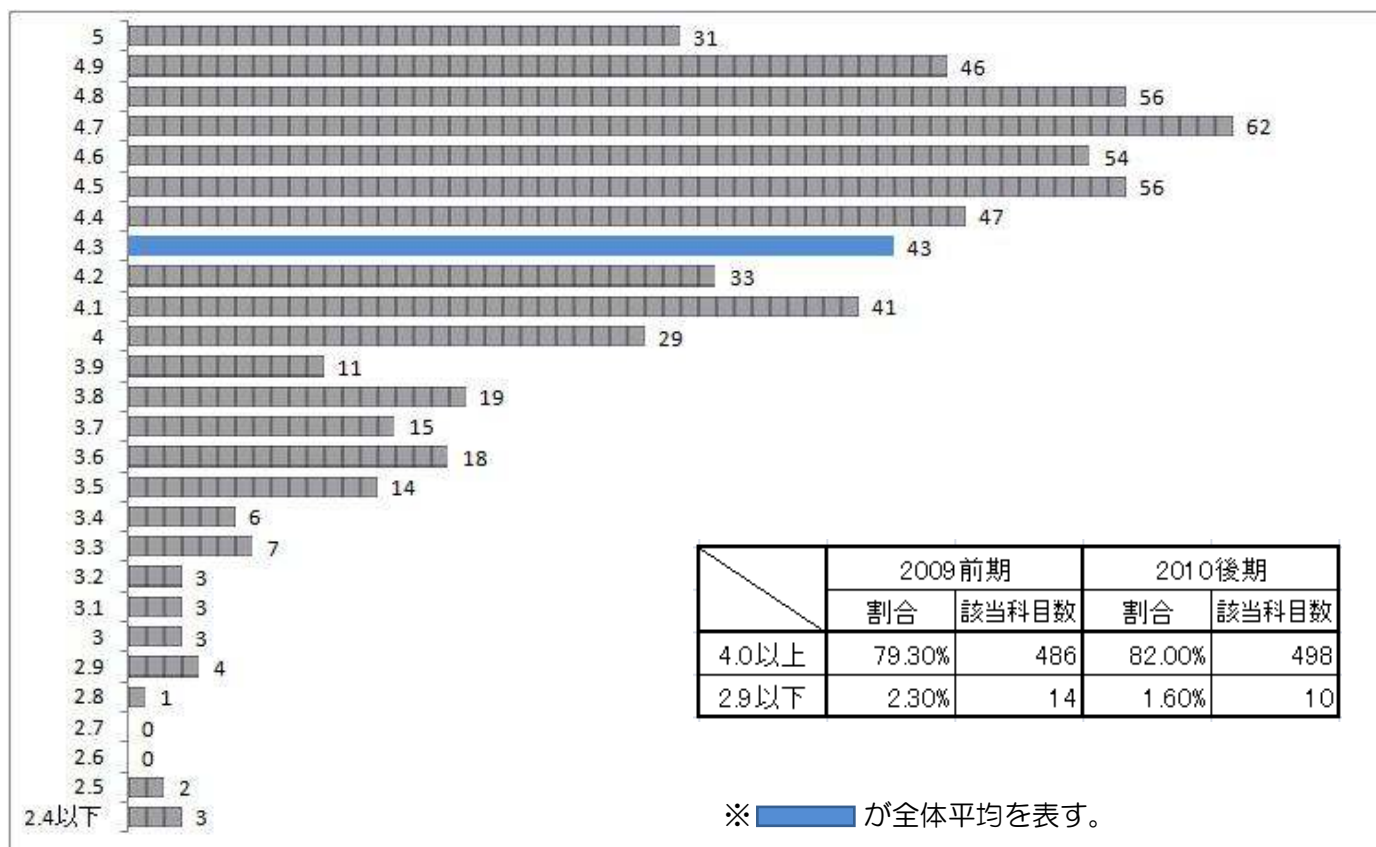
結果については、前年度に比べて特に大きな変化は見られない。設問2の「自主的に意欲的な学習努力をしましたか」の平均は3.82ポイントで前年度より微増したが、設問11の結果を勘案しても、改善のためなお一層の工夫が求められる。

授業の進め方を問う設問10と12に関しては、例年他項目に比べて評価が低めなのだが、それでもわずかな

向上傾向は見られ、各先生方のクラスに応じた対応や学生の理解度の把握などの面で、一定の進展があるものと思われる。

また設問15の「総合評価」では、前年度の4.21が4.27ポイントになり、これも順調な上昇傾向を示している。さらに下の度数分布表に見られるとおり、4.4以上の高い評価を得ている科目が相当数にのぼることは特筆に価する。ただ、もちろん数字がすべてではなく、今後も座談会などで、学生のニーズへのきめ細かな配慮を続ける必要があるだろう。

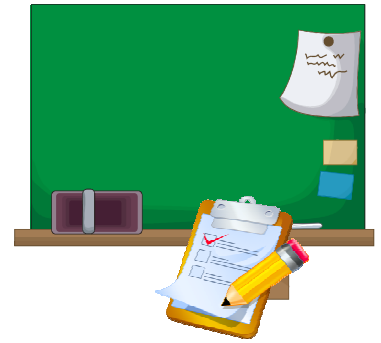
総合評価（全科目）度数分布表



2010年度授業評価アンケートの概略



1. 実施時期 2010年11月24日(火)～11月30日(火)
2. 対象学生 学部生・2部生
(科目等履修生、UNITYの他大学生も含む)
3. 実施科目 627科目(ゼミ、登録者5人以下の科目除く全科目)
4. 回答者数・回答率 のべ13,810名 61.3%
5. 回答者の属性



学 年	回答数
1年	5,356
2年	4,367
3年	2,156
4年	1,422
その他・無回答	509
合計	13,810

学科	回答数
英米学科	4,244
ロシア学科	1,095
中国学科	1,705
イスパニア学科	1,211
国際関係学科	2,338
第2部英米学科	2,733
その他・無回答	484
合計	13,810

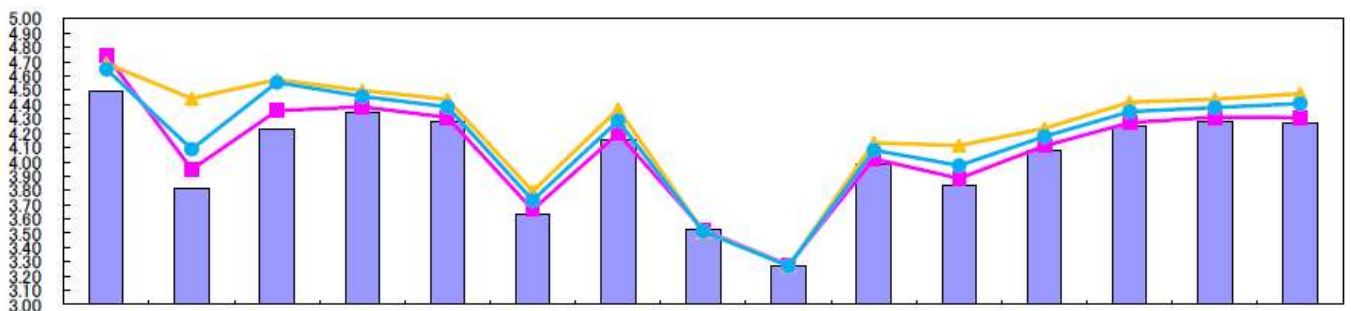
6. 回答内容

全 問 の 概 要 (2010年度後期)

《グラフ表示》

A=全体	13,810件(100%)
B=Q1で『4・5』を選択した学生	11,812件(86%)
C=Q2で『4・5』を選択した学生	9,084件(66%)
D=Q3で『4・5』を選択した学生	11,079件(80%)

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15
A	4.50	3.82	4.22	4.34	4.28	3.63	4.16	3.52	3.28	3.99	3.84	4.08	4.25	4.28	4.27
B	4.75	3.95	4.36	4.38	4.31	3.66	4.20	3.52	3.28	4.02	3.88	4.11	4.27	4.31	4.31
C	4.69	4.44	4.57	4.50	4.44	3.79	4.37	3.51	3.27	4.13	4.11	4.23	4.42	4.44	4.48
D	4.65	4.09	4.55	4.46	4.38	3.73	4.29	3.51	3.27	4.08	3.97	4.18	4.35	4.38	4.41



あなた自身の授業態度について			授業内容について					授業の進め方について				担当教員について		総合評価
Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15
この授業によく出席しましたか	自主的に意欲的な学習努力をしましたか	あなたから授業への出席状況、取組に評価できると感じますか	テキスト、配布資料は適切でしたか	理論や考え、専門用語などがわかりやすく説明されましたか	講義概要(シラバス)は役に立ちましたか	関連する領域に対する知識、関心が深まりましたか	授業内容は難しかったですか	授業内容の量は適切でしたか	黒板や映像資料などの使い方は効果的でしたか	宿題、参考文献の提示などにより、自発的な学習を促す工夫がなされていましたか	授業の組み立て、時間配分は適切でしたか	学生とコミュニケーションがとれ、質問にも丁寧に回答しましたか	話し方が聞き取りやすかったですか	この授業に対する総合評価をしてください

7. 自由意見（一部抜粋）

◎授業について

【専攻語学】

・会話の授業をもっと増やして欲しい。
⇒2009 年度より、ネイティブ教員のクラスを少人数化し、より密度の濃い授業になるよう工夫しています。

【兼修語学】

・兼修英語の授業が少なく、英語が全く身に付かない。
⇒兼修英語Ⅲが開講されていますので、ぜひ積極的に受講してください。

【成績通知関係】

・成績をいつでも、自宅の PC からも見られるようにしてほしい。
⇒セキュリティの問題上、現段階では自宅の PC から閲覧して頂くことはできませんが、今後検討していきます。

【カリキュラム関係】

・授業が特定の曜日に集中していて、取りたい授業が取れない。
⇒開講日をなるべく分散させるよう、今後検討していきます。
・TOEIC などの資格対策の授業を開講してほしい。
⇒キャリアサポートセンター主催で、対策講座が開講されています。ぜひ受講してください。

◎その他

・教員はアンケートの結果をきちんと見ているのか。
⇒データ処理したものを教員にお渡ししています。また、その結果を受けての教員コメントを、学内限定でホームページに公開しています。
・教室が寒かったり暑かったりする。
⇒環境問題に配慮して、室温は集中管理をしていますが、電源の ON・OFF は各教室で可能ですので、調整をお願いします。
・構内分煙を徹底してほしい。
⇒構内で喫煙可能な場所は、学生会館前の喫煙スペースのみとなっています。また、今年度 5 月 31 日の世界禁煙デーを一日全学内禁煙とするなど、受動喫煙防止の啓発も行っており、こういう機会を利用して皆さんも喫煙ルールを守る機運を育ててください。

8. 教員からのコメント

※その他の教員のコメントを含む全てのコメントは、学内限定で神戸市外国語大学ホームページに掲載しています。

山口 治彦 先生（担当科目：専攻英語Ⅰ講読〔2〕）

漫画とその翻訳、そして、アニメ版の DVD を用いるという企画は、今回、初めてのものです。消化不良であった部分もあると思います。たとえば、メディアの違いによる翻訳の変化についてもっと頻繁にコメントできると、（用意は大変ですが）素材をもっと生かせるのではないかと思います。授業のやり方についてのコメントは今後に生かそうと思います。たとえば、漫画がテキストとなっているだけに、文章のテキストに比べ、どの部分を問題にしているのかが、少し不明瞭になることがあったようです。これは資料提示装置を使って、視覚的に提示すれば解決できるかと思います。

山川 英彦 先生（担当科目：専攻中国語Ⅱ講読〔3〕 B、専攻中国語Ⅱ講読〔3〕 A、専攻中国語Ⅲ講読〔3〕 A、研究指導（山川）、中国文学史 2、中国文学特殊講義 2）
外国語の学習に簡便な道はないとよくいわれますが、「読む」ということもまったくそのとおりで、近道はありません。辞書を引けばすべて「読める」と考える人がいるかも知れませんが、「読む」ことでも会話と同じく経験を積み重ねなければならないことがたくさんあります。慣用句がその代表的な例ですが、それ以外にも、ただ単語の意味が分かるだけでは不十分で、中国に関する歴史・社会・文化などの情報も必要となります。様々な本を読んで 情報を豊富にしてください。

江阪 太郎 先生（担当科目：国際金融論 2、国際経済政策 2）

国際金融論 2 と国際経済政策 2 の受講生（授業参加者）の数は、他の講義科目に比べて、あまり多くない。これらの科目内容は、経済学理論の習得とそれを用いて現実の経済現象を分析することなので、本学の学生にとっては、非常に難しいと思われる。しかし、授業アンケートの結果を見ると、授業参加者の満足度は、全学平均に比べてかなり高い。これからも授業内容のレベルを落とすことなく、アンケートのコメントを参考にして、授業の改善をしていきたいと思う。

田村 美恵 先生（担当科目：社会心理学入門 2（学部、2 部）、社会心理学演習 1、人間関係論 2）

少人数での「演習形式」で行っている「社会心理学演習 1」や「人間関係論 2」では、今年も、授業内容や総合評価などにおいて高い評価をいただくことが出来ました。これらの授業では、グループ・ディスカッションやクラス・ディスカッション、資料提供や調査実習といった多くの課題があり、受講者の皆さんの高い意欲が求められる授業です。これは、一方では、常に緊張感があり「しんどい」授業なのではないかと思いますが、他方で、皆さん自身の授業に対する関与度も必然的に高くなり、そのことが授業に対する評価の高さにも繋がっているのではないかと思います。「授業が楽しい」というコメントも頂きましたが、私自身も楽しめる授業でした。今後とも、楽しく、充実した内容の授業にしていきたいと思いますので、皆さんの積極的な参加をよろしくお願いします。

また、「社会心理学入門 2」でも、全体的には、良い評価を頂きました。ただし、こちらは、演習形式の授業と異なり、毎年、200 人近くの受講者がいる上、（学部の授業では）大教室での講義形式であるため、特に「教室環境」について、受講者の皆さんに不便を感じさせてしまっている点多々あるかと思います。とりわけ気になったのは、“私語が多い”というコメントが少なからずあったことです。私の方でも、引き続き、「私語が出にくい」環境を保てるよう努力していきますが、受講者の皆さんも、快適な教室環境の実現に向けて、ぜひともご協力をお願いします。



《連載》「私のFD奮闘記」

今号からスタートする連載記事、「私のFD奮闘記」。先生方が日ごろ授業にあたってどのような工夫をされ、どのような思いで授業に取り組まれているのかを、リレー形式で紹介して頂きます。

記念すべき第1回目は、英米学科の野村和宏教授です。

大学の教壇に立って31年目が過ぎましたが、この間さまざまな学生を指導し試行錯誤を繰り返す中でようやく理想とする授業観にたどり着きました。それは学生が「毎時間、期待感を持って教室に向い、教室で学ぶことの喜びと意義を感じ、学習の達成感の余韻を味わって教室を離れることができる授業」です。2010年度はゼミや大学院の科目の他、学部英米学科1年専攻英語「発音」、2部「パブリックスピーチ」、学部「英語教育法」などを担当し、学生と共に充実した時間を過ごすことができました。私の取り組みがそのまま参考になるかどうかは分かりませんが、一部を紹介させていただきます。

1. クラス作りのもつ意味

授業が教員と学生の相互活動で成り立つとすれば、クラスルーム・ダイナミクスをうまく育てていくことが大切です。特に授業の第1回目、第2回目あたりは新しい学びのコミュニティとしてのクラス作りが欠かせません。第一印象は2度与えることができないことから、教員と学生相互のよき出会いが続く授業の成否につながります。また学生がお互いに向上を目指す競争的要素とペアワーク、グループワークなどの協同的要素を組み込み、教室で学生が集ってこそ意味のある授業展開を試みました。

2. 授業時間の有効活用

私の授業ではビデオカメラやスピーチの演台、音声教材、映像教材などさまざまな教具を用いるため授業の店開きに時間がかかります。チャイムが鳴ったらすぐに授業を始めるため休み時間に教室に行って授業準備をしながら、教室に入ってくる学生に英語で挨拶をします。またその日の90分の主な内容は黒板の左端に書いておき、学生が授業の中でどこにいるのかがいつでも把握できるようにしました。

3. フィードバックの重要性

学生へのフィードバックは学習の再動機付けのために大きな意味をもちます。毎時間宿題や発表があったり、学期中に課題レポートを何度も書かせたりするため、学生にとっては私の授業をこなしていくのは大変なはず。しかし教員がしっかりとそれらの意味を説明し、レポートにはきちんとコメントを書いてフィードバックすることで学生たちはとても熱心に取り組んでくれました。

成績評価についてはコンピュータを使った専用の成績処理ソフトを用いています。各学生の出席状況、授業中の活動、宿題、レポート、小テストの評価からいつでも最新の成績が分かるようにし、学期の途中で2回程度、一人ひとりに中間成績表として印刷して返します。これによりしっかり学習している学生はその調子を続けるとよいし、学習が不足している学生はそのままでは確実に単位を落とすことになるので奮起が必要といったことが分かります。授業が全て終わってからの包括的評価で手遅れになることを防ぐため、特に積み上げ式の語学科目ではこうした学期中の形成的学習評価はきわめて有効です。厳格な成績評価というのは厳しい点数をつけるということではなく、教員と学生の双方が納得した成績をつけることであると考えています。

他にもまだまだいろいろな仕掛けをしていますが、学生たちが授業の空間の中で自らの存在の意味を把握しクラスの一員として協同の学びに加わり、自律的学習者として育っていく姿を見るのは教師としていつも大きな喜びです。なお授業方法等についての参考資料も多くありますが、佐藤浩章編『大学教員のための授業方法とデザイン』（玉川大学出版部）には多くの有益な情報が記載されていますので一読をお勧めします。

<御輿FD部会長より>

上掲の「新連載」、いかがでしょうか。これからいろいろな先生方に、FD活動に対する考え方や、成功例・失敗例などを含めて、ざっくばらんにご執筆いただくつもりです。

さて、野村先生のどこまでも几帳面で折り目正しいお話に、ひょっとして引け目を感じてしまう先生もいらっしゃるかもしれないと思い、「お耳汚し」までに部会長のさえない失敗談をひとつ。

もう20年以上昔ですが、ヴァージニア・ウルフとい

う実験的文体で知られる作家を取り上げて、一年間講義したことがあります。「教師が本当に好きなものについて話せば、学生は必ずついて来る」と無邪気に信じていた頃でした。ところがみるみる受講生は減り始め、40人の学生が最後は7～8人に。さすがに気になって学生に聞いてみたら「先生が楽しんでいることだけはよくわかりました」との返事。要するに「ひとりよがりの熱心さ」はただの「はた迷惑」にすぎないのだ、とあらためて思い知ったことでした。

